

京都大学人文科学研究所共同研究最終報告書

1. 研究課題

「見えるもの」や「見えないもの」に関わる東アジアの文物や芸術についての学際的な研究

An Interdisciplinary Study on East Asian Works of Arts and Culture Concerning the Visible and/or Invisible Entities

2. 研究代表者氏名

外村 中

Sotomura Ataru

3. 研究期間

2019年4月-2022年3月

4. 研究目的

東アジアの文物や芸術を解釈する上での共通の基盤の形成をめざすために、その前提として、あるいは「見えるもの」なのかもしれないが、普通であればまずは「見えない（と思われる）もの」にまつわる理論や事象について、従来の分野の枠組をこえて国際的にかつ学際的に探求することが、本研究の主な目的である。中でも仏身や道をめぐる議論は特に有効な指針を与えるものであるから、重点的にとりあげる。そして、様々な分野の研究者が一堂に会し、外来あるいは固有を問わず東アジアにおける多種多様な理論や思想から読み取られる共通点や相違点などを確認しながら、理論と作品との間に認められる矛盾点にも注意を払いつつ、上記の探求と関連する具体的な事例（特定の芸術作品など）を選定し、その文化史上における位置づけをおこない、実地に即した解釈のモデルをしめす。対象とする作品は、考古遺物から彫刻絵画、建築庭園、芸能音楽などにまで及ぶ予定である。

We carry out international and interdisciplinary research beyond the framework of the conventional academic fields, as a preparation for establishing a common basis to the understanding of works of arts and culture of East Asia. Researchers from various fields come together to explore theories and works concerning the visible and/or invisible entities, which are supposed to be invisible to ordinary people. Since, we think, discussions on Buddhist and Daoist theories give a particularly effective guideline, we lay special emphasis on them. We not only confirm common and different points explained in a variety of theories and thoughts, no matter whether they may be indigenous

or not, but also pay careful attention to contradictions, which may be recognized between theories and works. We select concrete examples (specific works of art etc) and position them in East Asian cultural history so as to show practical models of interpretation. The works, which we investigate, range from archaeological relics to sculptures, paintings, gardens, architecture, music, performing arts, etc.

5. 研究成果の概要

班長が海外在住のため、発足時に年間四度の来日(6月・9月・12月・3月)に合わせて四回の研究会を実施し、各回毎に統一テーマを設定して連続する二日間に一日あたり二本、計四本の研究発表を行う計画を立てた。その後三年間、当班の掲げる研究課題と密接に関係する重要文献を選定して各回の統一テーマ(例:初年度第一回『涅槃経』、第二回『法華経』)に掲げたほか、より自由度の高い「各論」の回を設けることで、「見える」もの「見えない」ものにまつわる事象について、思想宗教(仏教・道教・儒教・神道など)、文物・芸術の諸ジャンル(考古遺跡・遺物、彫刻、絵画、建築、工芸、芸能、音楽など)を幅広くカバーする研究発表と討論が積み重ねられた。コロナ禍のため対面開催ができたのは初年度の三回のみで、以後オンライン基調に切り替わったものの、また一部変則的な日程を組まざるを得なかったものの、三年間、概ね計画に沿った運営がなされた。関連企画として行われた2021年3月のワークショップも含めると、研究発表の数は班長が通算十本、班員が通算三十一本に及んだ。各研究発表で提示される知見と、班員(各回とも三〇名弱が参加)相互の分野横断的な議論によって、各自の専門分野における研究が深化するという好循環が生まれ、ほぼ所期の目的を達成することができた。

6. 共同研究会に関連した主な公表実績

2021年3月28日、関連行事として国際ワークショップ「中国三教と日本神道の「見える」ものや「見えない」もの」をオンラインで開催し、班員4名による研究発表と質疑応答が行われた。50名の参加者があった。発表者と題目は以下の通り。外村中「道家系と儒家系と伊勢神道の「一なる」もの:「一なる」ものは「道」か「気」か」、齋藤龍一「仏像と道教像の図像的關係性再考:南北朝~唐時代」、福谷彬「道学諸派における『太極図説』解釈」、稲本泰生「北宋真宗期の仏教美術と三教理解—舍利莊嚴を中心に」。また、開催にあわせて『国際ワークショップ 参考資料集 仏教と道家系の「見える」ものや「見えない」もの』と題する冊子を刊行した。

7. 研究成果公表計画および今後の展開等

2022年度は、過去三年間の成果をとりまとめた、二十篇程度からなる論集の公刊にむけ、編集作業にあたる。年度前半は各発表者による論考の執筆期間とし、日本学術振興会（JSPS）の出版助成（研究成果公開促進費）に応募した上で、2023年度中の論集刊行をめざす。また関連企画として8月26・27日の両日、ドイツ研究振興協会（DFG）とJSPSの助成を得て、日独二国間学術交流セミナー『美術史学・考古学から見た伝統東アジアにおける「見えない」ものの変容』を、班長が所属するドイツ・ヴェルツブルク大学で開催する。同セミナーでは当班所属メンバーの若手・中堅研究者7名が研究発表し、これと同数のドイツ在住研究者と対論を行って、伝統東アジアの芸術を解釈するための共通基盤の形成をめざす。コロナ禍のため当初予定の2021年度は開催できなかったが、将来を担う研究者のネットワーク構築には対面開催が不可欠との認識から、翌年度への延期申請が認められた。準備は万端であり、すでに全員が発表要旨を提出し、翻訳作業も完了している。